映画評

帰るべき場所としてのサイダー・ハウス

畑山浩昭

『サイダー・ハウス・ルール』(*The Cider House Rules*)は、ジョン・アービング(John Irving)の小説で、1985年に出版された。1999年には映画化されている。原作はかなりの長編なので、映画化するにあたり、かなりの割愛や編集があると思われるが、拙稿は映画についての短い論評である。対象を原作の小説ではなく映画にしたのは、アービング本人が原作のエッセンスを抽出して脚本を書いた結果、アカデミー賞を受賞しているからである。したがって、拙稿では映画版のテクストを題材としたい。この作品では、人種差別や戦争、人身の取引や堕胎など、かなり論争を呼びやすい難しい問題を取り上げていながら、全体的には心温まる作品に仕上がっている。このような特殊な文学的空間の構築を可能にしている要因について、分析解釈を試みることとする。

物語の主人公は、ホーマー・ウェルズ(Homer Wells)とラーチ先生(Dr. Larch)である。ホーマーは、ニューイングランドのメイン州にある聖クラウド(St. Cloud's)という孤児院で育つ。この孤児院は産科を併設しており、この施設の創設者は、医者であるラーチ先生である。ラーチ先生は孤児であるホーマーを自分の子供のように可愛がり、立派な青年に育てあげる。孤児院には他にも数十人の孤児達と病院勤務の看護婦達が一緒に暮らしているが、ホーマーは最も年上の孤児として、ラーチ先生と一緒に、年下の孤児達の世話も担う。

ラーチ先生は産科医であるので、様々な女性の出産に携わるが、場合によっては、望まれない出生の堕胎も手がける。様々な事情があって、各地から訪ねてくる男女の相談を受けると、必要に応じて処置を行う。ホーマーは子供の頃からラーチ先生の助手のような形で手伝い、また、ラーチ先生も医療の知識と技術をホーマーに授けるため、ホーマーも医者として育っていく。高校にも行かず、もちろん医師免許も持たない彼が、産科の仕事をできるほどの腕前になる。ただし、堕胎は違法で、倫理的にも間違っていると信じており、自分としては受け入れられないことを強くLarchに訴え続ける。

ある日、堕胎の相談に来た若い男女との会話を通して、ホーマーは外の世界に興味を持つ。というのも、ホーマーは孤児院を出た事がなかったので、外の世界を知らない。カップルが堕胎の処置を済ませ、車で自分たちの街に帰る時に、ホーマーは孤児院を出る事を決意し、彼らと一緒に街に行ってしまう。そのカップルの男性はウォーリー(Wally)、女性はキャンディー(Candy)である。ウォーリーは行く当てもないホーマーのために、自宅の家業であるリンゴ園の仕事を紹介する。リンゴ園で働く人々は季節労働者で、白人の経営者家族を除いては、ほとんどが黒人や移民である。ホーマーは白人だが、彼らと一緒に生活しながら、リンゴ園の作業員として仕事を覚えていく。その

生活場所が、サイダー・ハウス（Cider House）と呼ばれる納屋である。

ウォーリーとキャンディーは恋仲であるが、ウォーリーは志願兵で、時期が来たら軍隊に戻ることになる。ウォーリーが軍隊に戻ったあと、徐々に、キャンディーとホーマーの間柄が近くなり、恋人同士のような関係になる。孤独になること、とり残されることに耐えられないというキャンディーは、次第に、ホーマーと性的な関係も持つようになる。ほとんど世間のことを知らない無垢なホーマーに対してキャンディーは純粋な魅力を感じ、一方、いろんなことを教えてくれるキャンディーに対して、ホーマーは刺激的な魅力を感じるという関係が成り立つ。ある日、ウォーリーは兵役の途中で事故に遭い、半身不随になって帰ってくる。これをきっかけに、ホーマーとキャンディーは離別し、キャンディーはウォーリーの世話に徹し、ホーマーは孤児院に帰る決意をすることになる。

ホーマーが孤児院に戻る決断は、別にも理由がある。サイダー・ハウスで一緒に生活するリンゴ園の労働者達は、ひとりのリーダーとその娘、そして、労働者として雇われている黒人や移民のグループで成り立っている。リーダーは、ローズ（Mr. Rose）である。リンゴの季節になるとそのグループでやってきて、一定期間、リンゴの収穫とジュースを生産する業務を行う。そして、季節が変わると、他の地域に移り、別の作業を行う。ホーマーが彼らと一緒に仕事をしているある日、ローズの娘が妊娠していることが発覚する。こどもの父親を告白しないが、耐えかねて、自分の父親であるローズが、相手だということが判明する。近親相姦による妊娠という特別かつ複雑な状況に直面し、ホーマーは妊娠している娘の堕胎を手伝おうと決心する。ラーチ先生に対して、認めていなかった行為を、自らの手で行うことになる。ちょうどその頃、ラーチ先生が亡くなった知らせを受け取り、孤児院に帰ることを決断するのである。

ホーマーが孤児院と産科に戻ったら、ホーマーがラーチ先生の後を継ぐための準備はすべて整っている。ラーチ先生がホーマーのために、医師免許を偽造している。戻って来たホーマーに孤児達や看護婦は皆、喜び、ホーマーはラーチ先生の後を継ぎ、孤児院と産科の運営に携わり、孤児達の保護者として生きていくところで物語は終る。

この映画が取り上げるひとつの問題は、人と人が関わる際に発生する葛藤や対立、及び、その結果についての良識のあり方である。リンゴ園の作業のリーダーであるローズが、実の娘を妊娠させた時、堕胎に関する医療の知識と技術を有しているホーマーが助けを申し出るが、ローズは、「お前には関係ない。俺たちのことに首をつっこむな。」（None of your business, mind your business）という表現で断る。このような表現における「ビジネス」（my business, your business）という世界は、立ち入ることを許さない世界であり、それは、個人的な思いではあるものの、背後に民族的な相違や社会的な相違、歴史的な相違等に基づく場合がある。ホーマーとローズの間であっても、ホーマーの倫理観や善意だけで解決に結びつかず、それ以前の前提として、人種の違いや社会文化に起因する人間の相違が作用するのである。

また、ウォーリーとキャンディーの恋仲に、ホーマーが入り込むときにも同じような問題が発生する。

ウォーリーが出兵している最中に、キャンディーとホーマーの距離が近くなり、関係を持つ間柄に発展するが、この場合は、浮気とか不倫という概念による認識ではなく、戦争や寂しさが原因となって生じた二人の関係として描き出される。したがって、映画の中では、それは「愛」(love)ではなく、「必要」(need)という語で説明され、二人がそのような関係になったのはお互いに必要だったのであって、愛し合ったわけではないという考え方である。このように、人と人の関係の中で描かれる、堕胎や浮気という倫理的に問われがちな問題を、どちらかというと、一人一人の人間が様々な状況に直面する中で自然に発生する気持ちに重きをおき、焦点を当てるのである。

孤児院を出るまでのホーマーは、自分としての倫理観や法社会的な考え方を持っており、その規範の中で判断し、発言し、行動する。しかし、孤児院を出て外の世界に飛び出し、様々な人々に接する中で新たに発生する自然な気持ちも大事にする。何が正しいのか、何が良いのかという疑問に向かい合い、必ずしも、社会的に決められているルールが物事を善処させないことを悟る。再度、孤児院に帰るときには、ラーチ先生の言動が理解できるようになっている。

ラーチ先生は、法を破る。望まぬ出生だと聞けば堕胎を引き受ける。自分の代わりの医師を産科の理事会が探そうとするときには、自分の医師免許を原本にして、ホーマーの医師免許状を偽装し、ホーマーに継がせる。ラーチ先生の発想は、法を守ることではなく、孤児達や女性達の不運や不幸をできるだけ緩和し、前向きに生きることにつなげることである。

このように、法やルールと実際の言動の葛藤という問いで作品を考えると、リンゴ園の作業者が居住するサイダー・ハウスに貼ってあるルールのシーンも理解できる。リンゴ園の作業者達は文字を読めないが、そこには規則が貼ってある。作業者達がホーマーに頼んで、読み上げてもらった時にわかったことは、そのほとんどが、屋根に上るなという禁止事項であった。主体性を持った労働者、勤勉で、善人である労働者としての意識を持つ彼らは、このルールの意味のなさに気づく。そして、「これは自分たちで作ったルールではない。自分たち、または、この場所を知らない誰かが作ったルールだ」として、廃棄してしまう。ルールが全く意味を持たず、作用しない社会が象徴的に表出し、より個々人の思いや考えに基づく言動の意義が弁護されるのである。

本誌の今回のテーマは「故郷」であるが、以上のような分析から見えてくるのは「帰るべき場所」としての故郷像である。この映画で、それぞれの登場人物は物理的に移動する。ホーマーは孤児院を出るし、リンゴ園の労働者は移動するし、ウォーリーも戦争に行く。それぞれ帰る場所はあるものの、それぞれの物理的な場所が故郷として作用するわけではない。むしろ、精神的な故郷の意味合いの方が大きい。ホーマーも、孤児院に帰るが、孤児院を出る前と帰った後では、精神的には全く異なり、むしろその精神が、物理的な故郷である孤児院に住まわせ、生活させることになる。これは、サイダー・ハウスの「ルール」の原理を本質的に理解したホーマーがたどり着いた場所であり、半身不随になって戻ってきたウォーリーと、それを受け入れるキャンディーがたどり着く場所であり、もちろん、ラーチ先生がたどり着いた場所でもある。精神的なルールが、ある物理的な場所を、居

るべき場所に変えて、本当の故郷にさせるということである。

困難に遭遇したときに、ホーマーは、「時が来るまで待とう」(Wait and See)という言い方で、治める場面がある。ルールを無理に適用して物事を処理するのではなく、時間が癒してくれることを待つことも大事であるという考え方、また、すぐには解決できない問題に忍耐強く向き合うことも、ルールではなく、人間の精神の変化に基づいた自然な解決法であるという考え方である。この映画が論争を引き起こさないのは、堕胎や戦争、家族の在り方などについての是非や善悪を議論するのではなく、そのような問題に直面する人々が、その倫理性や正義感は認識しながらも、自然な気持ち、本来的な精神に基づき、行動する勇気のような人間の力に光を当てているからである。